

## ウ 学校規模の現状と将来予測

小学校では、旧美土里町の小学校統廃合に伴い、平成 10～15 年度の間学級数が大きく減少したが、その後の変化はあまりみられない。平成 27 年度の学校別学級数を推計してみると、複数学級（1 学年 2 学級以上）は、小学校では、吉田小学校、中学校では吉田中学校の全学年で編成が可能であり、甲田中学校では一部の学年での編成可能と予測される。また平成 27 年度には小学校で新たに船佐小学校、甲立小学校、小田小学校の 3 校、その 2 年後の平成 29 年度では郷野小学校、来原小学校の 2 校で複式の学級が生じる可能性がある。

現在複式学級がある川根小学校、刈田小学校と併せれば全市内の小学校 13 校中 7 校で複式学級が生じると見込まれる。

### 安芸高田市立小中学校の学校規模の推移(学級数は普通学級数で計算)

学校名	1学級当りは平均値			15年度			20年度			21年度			24年度推測値			27年度推測値		
	10年度	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	
吉田小	411	13	32	394	12	33	395	13	391	13	30	394	13	30	408	12	34	
丹比西小	32	4	8	22	5	4	153	6	156	6	26	162	6	27	174	6	29	
可愛小	178	6	30	190	7	27	74	6	74	6	12	65	6	11	58	6	10	
郷野小	90	6	15	76	6	13	74	6	74	6	12	65	6	11	58	6	10	
刈田小	96	6	16	66	6	11	53	6	51	5	10	50	4	13	54	5	11	
根野小	145	6	24	124	6	21	101	6	98	6	16	96	6	16	88	6	15	
横田小	59	6	10															
本郷小	46	4	12															
北小	42	4	11	157	6	26	170	6	167	6	28	148	6	25	135	6	23	
生桑小	22	3	7															
川根小	31	4	8	32	4	8	23	3	23	3	8	27	3	9	27	3	9	
来原小	78	6	13	80	6	13	67	6	65	6	11	70	6	12	63	6	11	
船佐小	159	6	27	139	6	23	82	6	72	6	12	58	6	10	49	4	12	
甲立小	147	6	25	110	6	18	82	6	76	6	13	72	6	12	56	5	11	
小田小	80	6	13	78	6	13	69	6	70	6	12	63	6	11	51	5	10	
小田東小	134	6	22	102	6	17	100	6	100	6	17	90	6	15	91	6	15	
向原小	263	11	24	204	7	29	163	6	163	6	27	155	6	26	132	6	22	
合計	2,013	103	20	1,774	89	20	1,532	82	1,506	81	19	1,450	80	18	1,386	76	18	
				H10年度比 ▼239人 ▼14学級			▼481人 ▼21学級		▼507人 ▼22学級			▼563人 ▼23学級			▼627人 ▼27学級			

学校名	10年度			15年度			20年度			21年度			24年度推測値			27年度推測値		
	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり	普通学級数	1学級当たり		
吉田中	412	12	34	310	9	34	299	9	305	9	34	314	9	35	300	9	33	
八千代中	158	6	26	102	3	34	88	4	78	3	26	76	3	25	74	3	25	
美土里中	122	4	31	88	3	29	70	3	73	3	24	89	3	30	74	3	25	
高宮中	137	6	23	151	6	25	110	5	110	4	28	85	3	28	74	3	25	
甲田中	198	6	33	156	6	26	149	6	145	6	24	127	5	25	117	4	29	
向原中	149	6	25	135	6	23	104	4	99	3	33	74	3	25	85	3	28	
合計	1,176	40	29	942	33	29	820	31	810	28	29	765	26	29	724	25	29	
			H10年度比 ▼234人 ▼7学級				▼356人 ▼9学級		▼366人 ▼12学級			▼411人 ▼14学級			▼452人 ▼15学級			

(注) 平成 24 年度、27 年度の黄色の塗りのある学校は複式学級が予想される学校。

#### 複式学級の生じる可能性

公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律の第 3 条第 1 項及び公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律施行令第 1 条によれば、小学校で複式学級を編制するのは、以下の場合です。

- ① 1 学年の数とそれに引き続く学年の児童の数の合計が 8 人以下の場合。
- ② 1 年生を含まない場合は、引き続く 2 つの学年の児童の数の合計数が 1 6 人以下である場合  
(広島県教委では、2 年と 3 年、4 年と 5 年の複式学級は原則として認めていません)

安芸高田市小中学校学級人数予測(平成27年度)

《小学校》																			
平成27年度(予測)																			
学校名	児童総数	1年生			2年生			3年生			4年生			5年生			6年生		
		学年人数	学級数	平均学級人数	学年人数	学級数	平均学級人数	学年人数	学級数	平均学級人数	学年人数	学級数	平均学級人数	学年人数	学級数	平均学級人数	学年人数	学級数	平均学級人数
吉田小	408	67	2	34	66	2	33	74	2	37	68	2	34	67	2	34	66	2	33
可愛小	174	21	1	21	31	1	31	33	1	33	36	1	36	21	1	21	32	1	32
郷野小	58	7	1	7	4	1	4	12	1	12	12	1	12	9	1	9	14	1	14
刈田小	54	8	1	8	7	1	7	11	1	8	12	1	7	6	1/2	6	10	1/2	10
根野小	88	14	1	14	14	1	14	16	1	16	12	1	12	13	1	13	19	1	19
美土里小	135	21	1	21	20	1	20	20	1	20	27	1	27	23	1	23	24	1	24
刈田小	27	7	1	7	0			2	1/2	2	6	1/2	6	6	1/2	6	6	1/2	6
来原小	63	7	1	7	8	1	8	9	1	9	13	1	13	14	1	14	12	1	12
船佐小	49	14	1	14	7	1	7	4	1/2	4	11	1/2	11	6	1/2	6	7	1/2	7
甲立小	56	11	1	11	8	1	8	5	1/2	5	10	1/2	10	9	1	9	13	1	13
小田小	51	6	1	6	8	1	8	5	1/2	5	10	1/2	10	11	1	11	11	1	11
小田東小	91	18	1	18	14	1	14	15	1	15	17	1	17	11	1	11	16	1	16
向原小	132	19	1	19	17	1	17	26	1	26	23	1	23	18	1	18	29	1	29
合計	1,386	220	14	16	204	13	16	262	12	19	257	12	21	214	12.5	17	269	12.5	21

《中学校》											
平成27年度(予測)											
学校名	生徒総数	1年生			2年生			3年生			
		学年人数	学級数	平均学級人数	学年人数	学級数	平均学級人数	学年人数	学級数	平均学級人数	
吉田中	300	105	3	35	111	3	37	84	3	28	
八子代中	74	26	1	26	24	1	24	24	1	24	
美土里中	74	25	1	25	23	1	23	26	1	26	
高宮中	74	24	1	24	27	1	27	20	1	20	
甲田中	117	40	2	22	34	1	34	40	1	40	
向原中	85	32	1	32	29	1	29	24	1	24	
合計	724	255	9	28	248	8	31	224	8	28	

(3) 学校施設の状況

安芸高田市の小学校校舎についてみると、建築年では美土里小学校が平成15年建築で、最も新しく、可愛小学校、来原小学校も平成に建築された施設である。最も古い施設は、郷野小学校の木造校舎で、昭和10年建築である。これに次いで古いのは吉田小学校の昭和37年～39年であり、その他の小学校については、昭和50年代に建てられた校舎が多い。

建物構造としては、郷野小学校を除き、全ての学校が鉄筋コンクリート造で、階数は、3階建が吉田小学校など7校、2階建が可愛小学校など6校となっている。

中学校校舎についてみると、建築年から最も新しい施設は高宮中学校で、昭和63年建築となっている。その他の中学校校舎は昭和40年代、50年代に建てられた施設が多い。

校舎の構造は全て鉄筋コンクリート造で、特別教室棟、クラブハウスなど一部に鉄骨その他造の建物が見られる。

教育施設の耐震化の状況についてみると、校舎または体育館で「耐震診断の必要あり」と判断されている学校は、小学校13校中、吉田小学校、可愛小学校、刈田小学校、甲立小学校、小田小学校、小田東小学校、向原小学校の7校で、その他6校については、「耐震診断必要なし」と判断されている。このうち、危険度が最も高い吉田小学校の管理教室棟については、平成22年度に耐震工事完了予定である。

中学校では、6校中、高宮中学校を除く5校が「耐震診断の必要あり」と判断されており、このうち、吉田中学校の管理教室棟、甲田中学校の屋内運動場、向原中学校の教室棟等(2棟)は平成22年度に耐震工事完了予定となっている。

総括すると、市内の小中学校46棟のうち、約半数の24棟については耐震性を有しているが、残りの22棟については、改修が必要であると判断されている。

耐震化の状況（5段階評価）

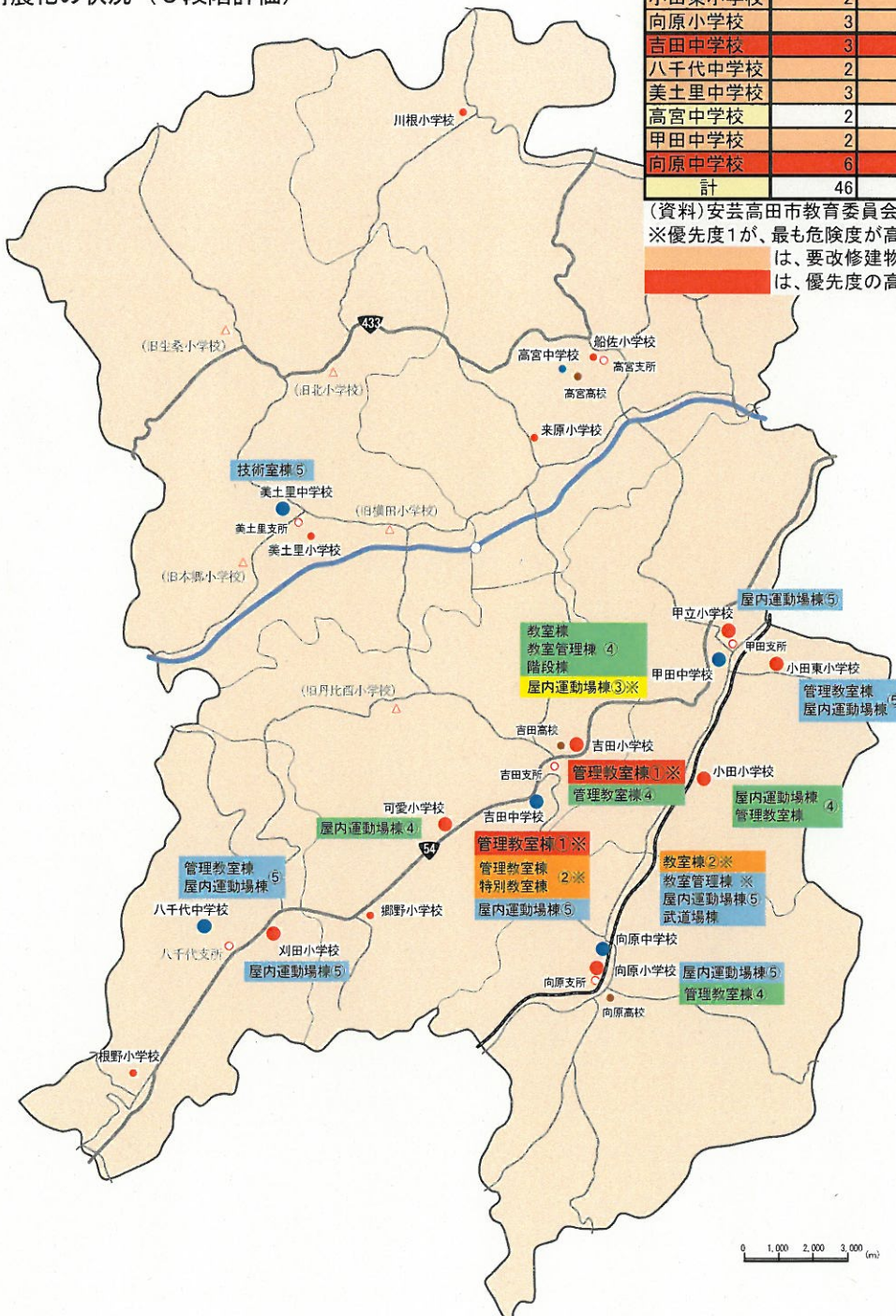
学校名	全棟数	耐震性あり	要改修	優先度調査	
				1, 2	3, 4, 5
				1, 2	3, 4, 5
吉田小学校	3	1	2	1	1
可愛小学校	3	2	1		1
郷野小学校	2	2	0		
刈田小学校	2	1	1		1
根野小学校	2	2	0		
美土里小学校	1	1	0		
川根小学校	2	2	0		
来原小学校	2	2	0		
船佐小学校	2	2	0		
甲立小学校	2	1	1		1
小田小学校	2	0	2		2
小田東小学校	2	0	2		2
向原小学校	3	1	2		2
吉田中学校	3	1	2	1	1
八千代中学校	2	0	2		2
美土里中学校	3	2	1		1
高宮中学校	2	2	0		
甲田中学校	2	0	2		2
向原中学校	6	2	4	1	3
計	46	24	22	3	19

(資料) 安芸高田市教育委員会

※優先度1が、最も危険度が高い。

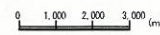
は、要改修建物のある学校

は、優先度の高い要改修建物のある学校



①	高 (危険度) ↓ 低
②	
③	
④	
⑤	

診断の必要なしは表記していない  
 ※：平成22年度耐震工事を完了予定  
 (平成21年4月1日現在)



#### (4) 安芸高田市の学校教育における課題

安芸高田市においては、各小・中学校の多様な活動により、基礎的な学力の定着が図られる一方、中学に進学した際、環境変化に対する戸惑いから不登校生徒の数が増大する等の課題が発生している。このことは、急激な少子化の中で学校規模も小さくなり、人と人との関わりの希薄化・固定化により、人間関係をうまく築けないことが1つの要因となっていると考えられる。

こうした課題の解決の方向として、中学校区単位に目指す教育目標を掲げ、小・中学校の教職員の共同研修、授業の相互乗り入れ、学校行事等の合同実施、児童生徒及び教職員が縦の連携を活かした活動をすることによって校種間の段差を少なくし、小学生の中学校進学に対する不安の軽減につなげているとの報告もみられる。

安芸高田市の今後の教育を考える際の一つの視点として、小・中学校が連携を深め、義務教育9年間で連続したきめ細かな指導に取り組む学校体制の確立が必要である。

さらに、昨今、子どもたちの体験不足、経験不足が指摘され、近所の遊び友達も少なく、学校という閉ざされた空間の中で培われた人間関係には偏りが生じやすくなっている。とりわけ学校内での人間関係の範囲が相対的に狭い小規模校においては、地域に開かれた学校として、地域と協力した子どもたちの社会体験の実施、豊かな自然体験の機会を提供してもらう等、地域と連携した「協育」の具体的な実施が重要な取組みの方向性であると考えられる。

このような中、少子化の中で安芸高田市内の小学校においては、8年先には市内13校中7校が複式学級を有する状況、また他の学校も複式学級にならないまでも、1学級が10人前後という少人数学級を有する小規模校になることが想定される。今後、過小規模校<sup>※</sup>や少人数学級を有する小規模校への具体的な対応が求められている。

※ 文部省助成課資料「これからの学校施設づくり」のなかで、学校の基本的条件を充たすための指標とし学校規模を学級数別に次のとおり分類しています。

学級数による学校規模の分類

学校規模	過小規模	小規模	標準規模
学級数	1～5	6～11	12～18

(注) 小学校、中学校が準用対象とされている。

(資料) 昭和59年 文部省助成課資料「これからの学校施設づくり」

### 3 過小規模校と小規模校の良い点と課題

本市では、過疎化や少子高齢化などの進展に伴い学校の小規模化が進んでいる。こうした状況が学校教育に及ぼす影響について、学校視察を実施し、学習面、社会面・生活面、クラブ・部活動面、学校運営面から過小規模校や小規模校の良い点と課題について検討を行った。

#### (1) 学習面

##### ○ 良い点

- ・学習の中で一人ひとりが発表等活躍できる機会が多くなるために、個別の表現力、思考力がきたえられやすい。
- ・複式学級では、児童だけで学習課題に取り組む場面が生じるため、自学自習の学習態度が形成されやすい。
- ・行動や活動はまとまりやすく機動性が高いため、多様な学習活動が仕組みやすい。

##### ○ 課題

- ・子どもどうしの多様な考えにふれる機会が少なく、友達の考えを聞いて自分の考えを深めることにつながりにくい。
- ・同教科の教員の数も少なく習熟度別に分かれて授業することが難しく、学習効果を高めにくい。
- ・複式学級では、同じ教室で行われている他学年の授業内容が気になることが考えられる。教員、子どもの双方にとって授業進行が難しいと感じられる。
- ・複式学級の場合、支援の必要な児童への支援や学習リーダーの育成の必要性など、学級運営で難しい局面が生じる場合が多い。
- ・複式学級の国語や算数などの教科は、限られた授業時間で複数学年の指導を行うため一人学習する時間が生じ、自学、自習するための訓練をしないと授業の目的を達成されにくい。
- ・複式学級ではどうしても授業の進捗は遅れる傾向にある。通常授業で不足する時間は補習授業により調整していく必要がある。

#### (2) 社会面・生活面

##### ○ 良い点

- ・給食・掃除当番などを通じて、上級学年が下級学年の手本となることから、上の学年が下の学年を指導する力が育まれる。また、人間関係の中で育つことで社会性が身につくことが期待できる。
- ・地域とのふれあいや高齢者との手紙のやりとりなど、地域住民との交流を通じて幅

広い年代の人々と関わりを持つことができ、生きる力が強くなると考えられる。

- ・地域との交流が多くなり、地域に誇りをもった子ども、ふるさとを大切にできる子どもに育つことが考えられる。

○ 課題

- ・同年代の友達が少ないことで限られた人間関係となってしまう、多様な考えにふれる機会が少なくなる。
- ・義務教育時代だからこそ体験できる体験やコミュニケーションの機会が少なく、社会性が育ちにくい懸念がある。
- ・入学から卒業まで同じ集団の中で、児童生徒の役割や位置づけが固定化しやすく社会性が育ちにくい。
- ・男女比の偏りが時として大きくなることもあり、その場合同性同士の友だち関係が形成されにくく、淋しい思いをすることがある。
- ・学校でも、家族のような感じが生まれ、学校としての緊張感が薄れる。
- ・特定の集団が形成された場合、その集団に入りにくい児童の受け皿が少ないことにより孤立しやすい。
- ・進学し、大きな集団に入った場合に学んだ力を十分に発揮できない可能性がある。
- ・高等学校への進学後、学級の規模が大きくなり、他と比べて自分の能力を位置づける経験の少ない子どもの場合は、社会面・生活面での気持ちが委縮してしまう可能性がある。

(3) クラブ・部活動面

○ 良い点

- ・地域と連携した学校づくりの取り組みにより、特色のある学校となる。

○ 課題

- ・運動部活動における集団種目や文化活動におけるブラスバンド等、集団で行う活動が制限され、種目選択の機会が狭められるとともに児童生徒が切磋琢磨する機会が少ない。

(4) 学校運営面

○ 良い点

- ・学校と保護者や地域が一体となって児童生徒の教育に携わることができる。
- ・児童生徒に教員の目が行き届くことにより、児童生徒の特性等の把握が容易であり、きめ細やかな教育が実施できる。
- ・教職員は子どもたち一人ひとりと深くかかわることができる。

- ・子どもたちの顔が見えることによって地域の大人の見守り意識が高まる。
- ・地元との交流の機会が多く、学校が地域に支えられることで様々な体験をすることができる。

#### ○ 課題

- ・地域での協力がないと学校行事が活性化しない。
- ・教員一人当たりの分掌事務が多くなり、研修の参加機会などに支障が現れる。
- ・同一学年での教員数も少なく教科研究や教員相互の情報交換も難しく、学習指導における教員の切磋琢磨がしにくい状況となる。
- ・少人数であるため、学級の雰囲気として、静かな場合、賑やかな場合など、極端に変化しやすい傾向があり、指導が難しい。
- ・中学校ではスポーツ、芸術、文化活動等の特色ある教育を実施することが望まれるが、全教科の教員が配置されないため多様な教育活動が深めにくい。
- ・複式学級の場合、複式学級の指導経験者が少ない中、指導能力の高い教職員の確保が難しい。また、教職員を中心とした学校独自の運営では限界がある。

安芸高田市ではこのような課題を考慮し、学習補助員の配置、ALT 5名の配置といった制度の導入の他、過小規模校においては、次のような対応を行い、各教職員が教育効果の向上に努めている。

#### ○過小規模校における工夫の事例

- ・複式学級における発言形式の定着リーダーノート（シナリオ）導入
- ・多様な考えを引き出すための、書く活動、話し合い活動の導入
- ・表現力育成のための「学習発表会」等を通じた表現の場の設定やことばの教育の導入
- ・社会性を培うための学校間交流、地域との交流、異学年交流の導入
- ・各種大会、コンクール等への積極的な応募、参加

など

## 4 望まれる安芸高田市での学校規模

### (1) 学校の規模

学校の規模については、それぞれの学校の置かれた地域性により、市内全ての学校における普遍的な基準を設定することは困難であるが、望ましい安芸高田市での学校規模というものは存在すると考えられる。前節に見られるような特に過小規模や少人数学級を有する規模であることから、様々な教育課題が生じてくるのも事実である。

このため、安芸高田市の将来を担う子どもたちにとって、どの程度の規模の学校で学ぶことが望ましいか、以下の4つの視点から検討した。

#### ① 学習面からの視点

学校教育は、本来的に集団を通じて培われるものであり、児童生徒の多様な考えにふれ切磋琢磨する中で学力はもとより高い人間性や社会性を育成する環境が必要である。

教職員の定員数は学級数を基に算出されるため、学級数が多い際には専門性を有する教職員を複数名配置することが可能となる。これより、学校におけるスポーツ、芸術、文化等のさまざまな教育活動のより一層の展開が期待でき、児童生徒の多様な可能性をはぐくむ教育環境の充実が期待できる。こうしたことから、ある程度の学校規模を確保していくことが望まれる。

#### ② 社会面・生活面からの視点

児童生徒が発達段階に応じて必要な知識、技能はもとより人間性や社会性などを身につけるためには、多くの人間とふれあい、互いを見つめることにより、切磋琢磨してお互いに刺激しあえる環境が重要である。

特に、児童生徒が集団の中で人間関係を固定せず、個の成長に応じた適切な役割や位置づけが行なわれ、多様な価値観やよい意味での競争心が生まれる環境の中で様々な経験をするためには、クラス替えが可能な規模を確保することが望まれる。

#### ③ クラブ・部活動面からの視点

児童生徒がクラブ・部活動において、自主活動の選択肢が広がることは一人ひとりの可能性や特性を伸ばし、健康維持、体力向上はもとより、学校や集団の帰属意識を高めるとともに学校全体が活性化し生活指導上の効果も高い。

学校において集団種目や活動などを児童生徒の希望に応じて実施することを可能にするためには、一定の児童生徒数を確保することが望まれる。



#### ④ 学校運営面からの視点

同学年を担当する教員集団や同じ教科を担当する教師集団が、校内研修や情報交換を通じて、教員同士が学び合い、高め合い、互いの考えを深め合い、実践が交流できる環境を確保することは、教師個人の教育力を高めるとともに学校全体の教育力を高める。

また、特に中学校ではスポーツ、芸術、文化活動等の特色ある教育をいっそう充実することが望まれ、そのためには、音楽、美術、体育をはじめ全ての教科に専門性を有した教員が配置できる学校規模であることが望ましい。

#### (2) 安芸高田市において望まれる学校規模

以上のような検討を踏まえ、安芸高田市の将来を担う子どもたちにとって望まれる学校規模は、以下のように考えられる。

小・中学校の規模は、人間関係の固定化を避け、より多様なかかわりの中で切磋琢磨してお互いが刺激しあい、柔軟な人間性や社会性を育くめるよう、また部活動を含めた自主活動でもより広い選択が可能になる環境を整備するため、クラス替えが可能な1学年で複数学級が確保できる規模が望まれる。

また、1学級あたりの人数は、多様な価値観に触れたり、よい意味での競争心が生まれたりする環境や、体育での集団種目、音楽での合唱やブラスバンド等、集団で行うスポーツや文化芸術活動が可能になる、1学級20名から30名程度が望まれる。

#### ※安芸高田市において望まれる学校規模

(学校規模)

- ・ 1学年複数学級
- ・ 1学級20名～30名程度

ただし、小学校12学級、中学校6学級を下回った場合においても、ある程度の規模が確保できれば、様々な工夫や努力を行い、特色ある学校・教育づくりを推進することによって、学校教育本来の機能を発揮していくことは十分可能であると考えられる。また、地域コミュニティ、家庭、教職員等の努力に支えられている複式学級のある過小規模校を否定するものでもない。子供たちの通学にかかる負担や地域との交流を考慮した場合、単純にこの基準をあてはめるだけでなく、地域別の事情と全市的な観点を比較考量しながら、慎重かつ現実的に対応していく必要がある。